私は、かつて芝居を始めた頃「新世代」と呼ばれていた。今は、コロナで「死ぬ世代」と呼ばれている。…こういうブラックジョークさえ、自粛が強制されそうな厄介な時節である。「精神」まで自粛する必要はないだろうに、我々の「精神」は、これまた厄介にできている。ひとたび、見えないものを怖がり出すと、見えないだけに、その「恐怖心」はなかなか拭い去れない。だから、ひとりでに「精神」は心の中で自粛し始める。そして、自粛したままなら良いのだが、その「見えないもの」に耐えきれず、時に「精神」は暴発する。向かう先は、「他者」である。

この『赤鬼』は、まさにその「精神の暴発」を描いている。別の言葉で言えば、「偏見」であり「差別」である。そして「差別」は、今の言葉で言うなら、まさに人と人との「距離」の問題でもある。というわけで、この『赤鬼』は運悪くタイムリーなものになってしまった。けれどもこの時節だからこそ、やる価値も見る価値もある作品に仕上がってしまった。そう信じて疑わない。

「表現」は、恐怖心とは、また別の、人間が誇るべき「精神の暴発」だからである。

野田秀樹